

理解不可能な語りに向き合う

ハロルド・ピンター『灰から灰へ』における聞き手の考察

阿部万里亜

1. イントロダクション

1996年に初演されたハロルド・ピンターの『灰から灰へ』(*Ashes to Ashes*)は、RebeccaとDevlinというおそらく夫婦関係にある男女の会話、特にRebeccaが語る過去の記憶を通してホロコーストを彷彿とさせるトラウマ的な出来事の記憶が浮かび上がってくる劇である。先行研究においても、本作はホロコーストとの関連において解釈されてきたが、ピンター自身は劇が単なるホロコーストの物語として解釈されることを拒んでいる。彼はRebeccaについて“the woman is simply haunted by the world that she's been born into, by all the atrocities that have happened”(“Writing” 246)と説明して、この劇がホロコーストのみならず、現在も起きている戦争や残虐な出来事の全てにも繋がる可能性を示唆している。

また、劇を通して浮かび上がってくるのは、特定のトラウマ的な出来事というよりは、むしろピンターを取り巻く当時の状況である。劇における時代は現在に置かれており、作者ピンターはRebeccaに、観客はDevlinに似ている。ピンターとRebeccaはホロコーストやその他のトラウマ的な出来事を体験した当事者ではないにも関わらず、それらの記憶に影響を受けているという点において類似している。一方、Devlinと当時の観客には、自らに直接関係のない出来事への無関心という共通点がある。ピンターは当時、観客が自らの政治劇を見た観客の反応に苦言を呈している。インタビューの中で“The world we've been encouraged to inhabit in London is a world of cynicism and indifference”(“Writings” 249)と語り、観客が劇で扱われている問題に真剣に向き合わないことを非難した。このような観客の反応は、Rebeccaの語りに対するDevlinの反応に似ている。実際、ピンターの妻Antonia Fraserは、ピンターが「Rebeccaは世界の痛みから逃れられない芸術家だ」と述べて自らをRebeccaと同一視し、Devlinのことを彼女に対して残忍な人々と結びつけていたことを日記に記している(216)。つまりRebeccaとDevlinの対立は作家ピンターと観客の対立の反映とみなすことが可能となる。

本発表ではピンターがDevlinを代理観客として劇中に置くことで、観客に劇に対する自らの反応の再考を促していることを論じる。さらに結末において、Devlinと観客の境界が消滅することを示し、このような劇展開を通してピンターが観客にどのような問いを投げ掛けているのかを考察する。

2. Devlinと観客の類似性

Devlinと観客は次の三点で類似している。第一にRebeccaの理解に失敗することである。冒頭でDevlinはRebeccaの過去に無知であり、元恋人の存在を知ると“I'm in the dark. I need light.”(399)と述べ、光を知、闇を無知と結びつける比喩を用いながら、彼がいかにRebeccaの過去を知りたいかを伝える。この時点において観客もRebeccaについてほとんど知らない。Charles Grimesが指摘するように、Rebeccaの過去を理解したいという欲求は、観客とDevlinに共通する(200)。しかし、Devlinも観客もRebeccaを理解することはできない。その一因はRebeccaの語りの変化にある。Rebeccaのアイデンティティや元恋人の男のアイデンティティには一貫性がない。彼女は元恋人の男について、“He was a guide.”(406)と語り、男が旅行代理店で働くガイドであったと述べるが、その直後には彼が「赤ちゃんを母親から奪う」というホロコーストを想起させる行為に加担していたことに言及する(406-7)。Rebeccaは元恋人についての一貫したイメージを構築しない。さらに、語り直しのたびにRebeccaは、事件と自らの関係性を変えていく。二度目の語りでは目撃者に、最終的には当事者として語るに至り、語りが彼女をトラウマ的な出来事の当事者へと近づけていく。このような語りの変化はDevlinや観客を混乱させる。

第二に、残酷な出来事に関する語りには、何らかの権威による裏付けが必要だと考える点である。DevlinはRebeccaの「車で男が母親から赤ちゃんを奪っていた」という語りに対し、Rebeccaに“‘What authority do you think you possess which would give you the right to discuss such an atrocity?’”(403)と問いかける。Devlinは非人道的な出来事について語る権利は何らかの権威によって裏付けられているはずだと考えており、その語りの正当性を問うことで、Rebeccaの語りのコントロールを試みている。Devlinの問いはRebeccaの口を封じる圧力として機能しているのである。GrimesはDevlinの問いを、劇を見た観客から噴出する反応を具現化したもの(202)と解釈している。つまり語る権利や正当性を問いただし、残酷な出来事に関する語りを抑圧してしまう危険性は観客にとっても無縁ではないのである。

Devlinと観客の第三の類似点は残酷な出来事への無関心である。Devlinは男が虐殺に加担していたという側面

を無視し、Rebeccaの元恋人としての側面のみ注目する。男の話聞いたDevlinは、Rebeccaが自分に隠れて浮気していたのではないかと疑い、“Were you unfaithful to me? Why didn't you confide in me?”(414)と責める。しかし、それがDevlinと出会う以前の出来事であったとすれば、語る必要はないと伝える(415)。また、Devlinの語りは一貫して、Rebeccaの恋人が虐殺に加担していたという重大な側面を無視している。彼は自らとは関係のない非人道的な出来事には興味を示さないのだ。このようなDevlinの態度は、ピンターの政治劇に対する観客の反応と似ている。両者とも直接的な関わりのない出来事には無関心であり、トラウマ的な出来事の語りを聞くことを避けている。

以上、Devlinと観客の類似性を確認した。両者には三つの共通点がある。第一にRebeccaの理解に失敗すること、第二に語りが権威によって正当性を保障されるべきだと考えること、第三に世界で起きているトラウマ的な出来事に対して無関心であることだ。本作は代理観客であるDevlinに、理想的ではない観客の反応を投影することで、観客に自らの反応の省察と再考を促している。

3. 結末におけるDevlinと観客の境界線の消失

結末においてDevlinと観客は一体化する。観客に近い存在として提示されてきたDevlinは、Rebeccaに無視されることで、登場人物としての存在感を失う。その契機は、彼がRebeccaと元恋人とのやり取りの再現を試み、失敗することにある。直前のシーンにおいてRebeccaは事件を「ブラットホームで赤ちゃんを奪われた」母親の立場から語る。Devlinは彼女の語りを止めるため、Rebeccaが冒頭で語った元恋人とのサディスティックなやり取りの再現を試みる(428)。元恋人の真似をすることでRebeccaのトラウマ的な出来事の語りを止めようとするこの行動は、彼の聞き手としての能力の限界を示している。しかし、Rebeccaは呼びかけには応じず、DevlinはRebeccaとの関係性の再構築に失敗する。

Devlinの行動を無視したRebeccaは「男が母親たちから赤ちゃんを奪っていた」という出来事を事件の当事者の立場から語る(429-431)。彼女の語りの一部はこだまとして反響するが、そのこだまは、ホロコーストを初めとする残酷な出来事を体験した人々の集合的な記憶を象徴すると考えられる。Rebeccaの語りに圧倒されたDevlinは元恋人の男の演技をやめるのに伴い、観客の視点はRebeccaの語りに向けられるため、Rebeccaに無視されてその場に立ち尽くすDevlinの存在感は薄まる。Rebeccaの語りはDevlinというよりは、むしろ観客全体に向けられており、DevlinはRebeccaの語りを聞く観客の一人になる。

Devlinと観客の境界線の消失は、観客がより深く劇に巻き込まれることも意味している。Mark Taylor-BattyはRebeccaが出来事の当事者になったことで、観客が目撃者の立場に置かれると分析している(“What Remains?” 114)。ピンターはDevlinの立場に観客を置き、Devlinの役割を観客に負わせることにより、観客に「自分と関係のない過去の記憶の代弁者に耳を傾けることができるか」という挑戦を投げ掛けているのである。

4. 結論

本発表ではピンターが『灰から灰へ』においてDevlinを観客に近い存在として描いていることを示した。観客とDevlinは、Rebeccaの語りを理解したいという欲求と理解の失敗という点において類似している。また、両者は、トラウマ的な出来事の語りが権威によって裏付けられていることを求め、当事者ではないにも関わらず、トラウマ的な出来事について考え、語ろうとする人々を抑圧する。さらに、Devlinには世界で起きている出来事に対する観客の無関心が投影されている。ピンターはDevlinという代理観客を劇中に置くことで、観客に自らの無関心を省みることを要求しているのである。

結末において、観客とDevlinの境界線は失われ、観客はRebeccaの証言の聞き手となる。本作は、トラウマ的な出来事の語りに遭遇する可能性は誰にでもあり、それを聞きとることは社会全体の責任であることを、訴えているのである。

引用文献

Fraser, Antonia. *Must You Go?: My Life with Harold Pinter*. Weidenfeld & Nicolson, 2010.

Grimes, Charles. *Harold Pinter's Politics: A Silence Beyond Echo*. Fairleigh Dickinson University Press, 2005.

Pinter, Harold. *Ashes to Ashes. Plays 4*, 3rd ed., Faber & Faber, 2011.

Pinter, Harold. “Writing, Politics and *Ashes to Ashes*.” *Various Voices Prose, Poetry, Politics 1948-2008*, Faber & Faber, 2009, pp. 238-54.

Taylor-Batty, Mark. “What Remains?: *Ashes to Ashes*, Popular Culture, Memory and Atrocity.” *Pinter Et Cetera*, edited by Craig N. Owens, Cambridge Scholars Publishing, pp.99-116.